

令和2年11月1日発行 春燈/第75巻第11号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

11月号

2020 November



久保田万太郎の句

すしぼんもふぐもきらひで年の暮

『流寓抄以後』昭和三十八年

「せつかくのお志には候へど……」の前書がある。師は高級食材や生ものより、甘辛い物菓を好まれたと言われる。既にご高名で酒席の機会も多くしかも年の暮ともあれば断りもやむを得ない。「嫌いで」と否定語ながら助詞で弱められている。前書と併せよむとユーモアさえも感じる。市井のくらしや哀歓を文芸のテーマとされた万太郎師のお人柄躍如の一句と思います。

山下 健治

久保田万太郎の句

なにゆゑのなみだか知らず鰯雲

『流寓抄』昭和三十三年

公人として夥しい肩書と榮譽に身を置く万太郎師は、前書を付けた句を人に贈ることが多かった。掲句には「九月二十八日、宮中にて御陪食（五句）」の前書がある、昭和二十二年日本芸術院会員に任命され、翌年宮中での御陪食に招待された時の一句である。純粹で淋しがりやで涙もろい嘘のない万太郎師の人間性と心情が伝わってくる。私のかつての記憶が鮮やかに蘇る。

山下 朝香

安立公彦

百日紅むらさきけぶる夕べかな

渡り鳥夕日は色を尽くしけり

放浪の鳥もねぐらへ秋夕べ

新米の湯気にも思ふ戦後かな

椅子一つ庭に置き待つ今日の月



燈下集

○ 久米憲子

メリーウイドウ通す月日や走馬灯

蝸の声をつめこむ旅靴

里山や帽子の好きな赤とんぼ

ペン先に思ひを込める文月かな

稲妻の走るやかかあ天下の地

○ 小倉陶女

残る蟬いのち惜しみて夜を鳴く

しばらくは流灯に添ひ歩みけり

蛸や形見の数珠の褪せし房

いわし雲どこにも行けぬ風見鶏

暮れ残る芙蓉の花のほとりかな

○ 荒井慈

空蟬の琥珀を透かす夕日かな

夜光虫開けてしまひし玉手箱

旅靴使ふあてなき晩夏かな

結果よし肩の荷下ろす夜の秋

盆踊人の輪人の和を為せり

○ 廖運藩

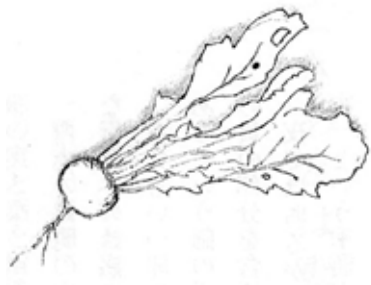
灯籠や昔灣生のオハラ節

一堂の神仏雑居施餓鬼寺

盂蘭盆や旧家に多き忌み言葉

鬼の絵の角みな白し施餓鬼棚

無縁塚ついでに拝む鬼供養



○ 佐渡谷 秀一

甚平や再配達に頭下げ

懐かしき面影たぐる盆の月

つくつくし行先告げず去りにけり

白粉や独り住まひに咲き残る

明日もまた家居の自粛秋の風

○ 沼田 桂子

朝顔の大垣根ある漁師町

此の先は肩幅道や烏瓜

向日葵と家族写真を撮りにけり

包丁のすつと入るや秋の茄子

無人の家雑草焦がす秋夕焼

○ 宮田 豊子

遠蟬に勞られぬる老いの季

すべき事山積みにして百日紅

白芙蓉咲きてすぐ閉づ師の遠忌

秋暑し地震情報頻りなり

「喫茶去」てふ茶杓爽やか水屋棚

○ 呂 秀文

早逝の夫に一言鬼の月

鬼月や一寸法師の物語

鬼月や我は東に君は西（妻はクリスマスちゃん）

ファッションはだぶだぶルック巴里祭

これからは贅沢三昧終戦日

○ 陳 妹蓉

努力家の部長昇進百合の花

コロナ禍に秋のアラモード断念す

久々に家族が集ふ百合の花

秋近し倉敷実ちて新車買ふ

久しさを家族団欒豊の秋

○ 井上 正子

夫婦して長寿を祝ふ良夜かな

長き夜や幾多の苦難振り返る

たわいなく椅子に免れて昼寝かな

朝顔の誘ふ清涼竹めり

無花果の手先器用に皮を剥く

○ 三代川 玲子

思はずの独語首振る扇風機

舌打ちのやうに短く真夜の蟬

流刑地の浜昼顔や砂を這ふ

つくづくとひとりと思ふ法師蟬

徐福船団不知火ともしさまよへり

○ 豊谷 青峰

不知火や肥後に友あり地酒有り

不知火を一目見たさの旅幾日

現るる城の石垣霧晴れて

したたかに垣を越えたる葛の花

葛の花見ぬ間に蔓の刈られけり

○ 高埜 良子

秋立つや長き回廊ひとりの歩

ボサノバの流るる広場緋のキャンナ

紫苑咲く明治の母の訓かな

おしろいや草の勢を去なす風

枯山水の夕日に秋を惜しみけり

○ 吉川 隆

公園の負けも爽やか将棋かな

稲妻や山の手線の内の空

一駅を歩くとせむか秋夕焼

唱歌集妻と歌ふや秋の夜

秋の夜や眠り誘ふグレゴリオ

○ 本田 保

河童忌や頭の皿に水の無く

河童忌や自から命断つ「阿呆」

思考する腕こまねきて我鬼忌かな

神仏に抗ふ自殺我鬼忌かな

シャンソンを口ずさみぬる巴里祭

○ 瀬戸 峰子

ご城下の始終見守る臺

処暑なるに世はをさまらぬ事ばかり

百日紅猛き陽浴ぶも色褪せず

水引草ルビほどの紅奔放に

吾亦紅語り尽くせぬ情あり

余言

安立公彦

八月やしまひ忘れし日章旗

佐藤 信子

「日章旗」は日の丸の旗、日本の国旗である。辞書によると、江戸時代、幕府の船の標識として用いられ、明治に入り、政府もこれを継承した、とある。その後、平成十一年の「国旗国歌法」の制定により、国旗の色、縦横の比率、日の丸の寸法等も規格化されているとのこと。

最近、祝日に日章旗を掲げる家が、とみに減っている。近隣の家で、正月ほか祝日には必ず日章旗を掲げていた家があったが、数年前からその景も見られなくなった。作者の家も祝日には必ず日章旗を掲げ仕舞っていたのに、「しまひ忘れし」に、一抹の哀愁を感じる句である。

はたた神追伸のごとまた鳴るや

大室恵美子

「はたた神」は周知の通り「雷」。「霹靂神」。雷鳴は季語の中でも、殊に自然の力を感じさせる。台風は風の現象として怖れられるが、雷鳴には、同じ天空の異象の中でも、

稲妻、雷鳴を伴うものとして、人知の及ばない神秘性を蔵し、それはまた天空の光彩でもある。
この句、「追伸のごと」が軽妙である。「はたた神」への挨拶とともに、雷鳴への共鳴とも受け取れる句だ。

野仏の頬なでてゐる赤のまま

小張 志げ

「野仏」は市街地で暮らしている現代人にとつて、余り目にしない景であるが、何となく懐かしい思いの仏像だ。野路の三叉路や大樹の下などで見る野仏には、趣がある。常に赤い前垂れを架けていて、声を掛けると返事が返って来るような牧歌的な親しさがある。

今、その野仏の頬を、「赤のまま」がなでてゐる。この花は、「大蓼の花」より「赤のまま」の方が親しみがある。「頬なでてゐる」と「野仏」の取合せが善い風景だ。

赤き字の我が名の墓標子と洗ふ

金山 雅江

「墓標」即ち墓石である。生存者が建てる場合は、墓標の文字は赤色とすると言う。「赤き字の我が名の墓標」はそのことを明確に示している。それと共に「赤き字の」持つ幻影をも感じさせる言葉と言えよう。

作者は今、その墓標をご子息と洗っている。人はみな、

盆や正月を迎える前には、墓域の掃除を忘れない。この句の場合もその慣わしの一つである。その事は承知の上で、尚、「赤き字の」が印象に残る句と言えよう。

盆踊人の輪人の和を為せり

荒井 慈

「人の輪人の和を為せり」は全くその通りである。輪は円い形。「人の輪」はその円い形に人が結ばれている。「疎通」である。「人の和」は、文字通り和を結ぶこと、平和であること。更に「和」という言葉には、日本を意味する「大和国」の表意もある。

作者は今、盆踊を見ていてふとこの言葉が浮かんで来たのか。或いは、コロナ禍蔓延のため中止となった盆踊を思いつつ出て来た言葉かも知れない。納得の句と言えよう。

惚けても忘れ得ぬ日よ終戦日

篠原 幸子

八月十五日は終戦記念日。敗戦日、敗戦忌である。作者は昭和二十年のこの日、小学校高学年だった。これは投句用紙の年齢を参考にしたので、私もそうだった。遠いあの日を思うと、今は故人となった、家族や友だち、学校の先生たちの姿が思い浮かぶ、この句が示す、「忘れ得ぬ日」であり、そして「忘れてはならない日」でもある。

この句、上五に「惚けても」が付いている。私たちには

忌避語、この句の場合は仮想の言葉である。納得の句だ。

法師蟬忽と別れの来りけり

西岡 啓子

去る八月十三日に逝去された夫君への悼句である。作者も夫君も生地は山口県と聞く。誤嚥性肺炎治療用リハビリの最中とのこと。今年の異常気象も拘わつていよう。

掲出句、「忽と別れの来りけり」に作者の思いが遍く籠められている。「別れ」にも種々さあるが、長い間連れ添って来た夫婦の別れは殊に厳しい。「法師蟬」が善く効いている。同時発表の〈秋めくや夫見えぬ道ふりかへり〉、〈八月尽かなしきまでに青き空〉も、思いの深い句だ。

秋時きの種を浸すや迢空忌

石橋 邦子

この「秋時き」は菜種だろうか豌豆か。冬、春に収穫する野菜の種は秋に蒔く。詳細は分からないが、普段見馴れている農作業には、長い歴史と考察がある。その結果が今日の農業の仕様として、私たちの日常を支える「食」の基本となっている。「種を浸す」もその一つである。

「迢空忌」は九月三日。国文学者であり歌人としても高名な折口信夫の忌日である。歌人釈迢空として、現代短歌への功績は大きい。へ人間を深く愛する神ありて もしもの言はば われの如けむ 迢空。遺稿より。

当月集

安立 公彦選



○ 佐俣まさを

改札を出で炎天の人となる
珈琲熱し葉を移す夜長かな
駅地下に偲ぶ古里栗おこは
峡深き終着駅や秋の蟬
在所守る叔母のふるまひ茸飯

○ 山浦紀子

○ 室井津与志

吐息つく赤きヒールや水中花

令和また八月一日は誕生日

ゴーギヤンの湯浴みの女夏木立(タヒチ)

卒寿てふ生きとし生きて夏の宴

サーファーと犬の背染むる落暉かな

八月や惨事の多き九十年

ゆるやかに雲は朝へと秋海棠

玉音の定かならずや敗戦日

星今宵ネイルアートの白砂かな

直立不動玉音拝す玉の汗

○ 田中嘉信

○ 中上馥子

梅雨晴や日に一便のバスに乗る

夏料理味はふ迄の法薬よ

青鳶の虚空を探る蔓の先

農水路わが物顔の水馬

万緑を眼下に高压送電線

水琴窟の音を消しぬる蟬時雨

千曲川秋立つ空を映しけり

忙しげに辞する盆僧口上手

蝸や暮れなづみぬる懐古園

流星や逝きし友垣より伝言

春燈の句

安立 公彦選



すめろぎと渋茶の夢やうたの秋

東京 小林 文良

みづひきの風あしらひの紅のすぢ

寒蟬の鳴き細りして止みにけり

酔兆す芙蓉や風の夜会服

夕刊を取りに数歩や庭の秋

京都 村上 國枝

雷神去り活き活きと鯉動き出す

不意を衝く悪声鴉明易し

生垣の隅に咲きたる萩の花

夕暮れてなほ鳴き止まぬ法師蟬

青縞の目立ち始むや烏瓜

露けしや目鼻の欠くる野の仏

十葉のひそかにふゆる売屋敷

鍵をせぬ里の暮しや赤とんぼ

京都 大槻 祐二

家々にこぼるる萩や坂の町

かなかなの声を添へある山料理

秋立つやミイラの特別展ちらし

山門を行きつ戻りつ赤とんぼ

福井 西本 花音

冷房に籠もれる脛の細さかな

炎昼や紅白の旗振る漢

戦争の特集多き八月逝く

新涼や看護師に欲し千手観音

兵庫 川端 正紀

愛知 後藤 大

寂しき街ぬけて瀬戸ある初秋かな

初秋やコロナ禍尽きぬ地球儀廻す